

I am coming の裏切り

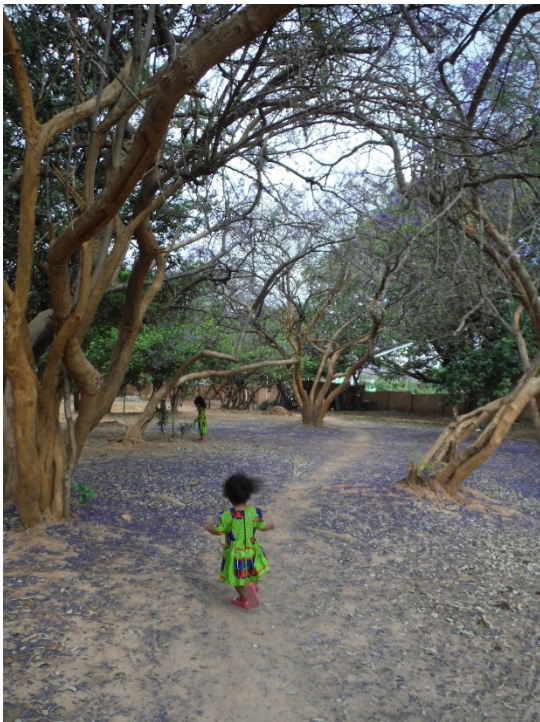
待つ身の不安

夜中、ザンビア共和国の首都ルサカのメインストリート沿いに建つ集合住宅は、意外にも物音が少ない。時折聞こえてくる人の声や階段を上り下りする足音は、彼の帰宅を期待させ、その直後に自宅の扉のノブがまわされる音が続かなければさらに不安が増す。「I am coming」と言ったきり、なんの連絡もなしにこんなに遅くなるなんて。もしや物盗りに抵抗して突き飛ばされてしまったのか。そのときの頭の打ち所が悪くて起き上がれなくなっているのか。いや、物盗りに遭うまでもなく、酒を飲んで酩酊して眠り込んでしまったか。はたまた、悪意を持った知人たちに取り囲まれてしまったか。もしくは単純にタクシーに乗って帰るときに事故にあったのか、いや、タクシーごと強盗にあったとか。いや、タクシーの運転手も強盗のグルだったとか……。想像力をたくましくする私に、この街に限らずアフリカ一帯で起きていると耳にしたことのある事件のイメージが一気に襲いかかる。その次に思うのは、この眠れずに不安でいる私に思いがはせられない相手の思いやりのなさに対する寂しさと悲しさ。そして、夜が明けて彼が帰宅しなかったときに、なにをすればい

いのかについて考え始める。明日は日曜日だから、メイドはやって来ない。子ども2人と一緒にうろうろ探し回るわけにもいかない。それに私も妊娠中だから、無理に動けない。それにしても、幼い子ども2人と身重の自分を家に放っておいて、連絡もなしに奴は一体なにをやっているのか！やはりなにかあったとしか思えない。物盗りに抵抗して突き飛ばされてしまったのか。そのときの頭の打ち所が悪くて……。この繰り返しの思考のなかでまどろんでいるうちに空が白みかけた頃、ようやくトントンと扉が叩かれる。

ルサカに住み始めて2年が経過した。私の仕事のため、ウガンダ人の夫は子ども2人の面倒をみるためにルサカにやって来た。それまで日本とウガンダと離れて暮らし、毎日の1分足らずの電話で安否確認をしていた私たちは、はじめて一緒に暮らす機会を得た。その場所は、ザンビアというお互いにとっての外国であった。しかしザンビアの首都ルサカには英語を話せる人が多く、簡単な会話ならば英語を使える夫は、たとえルサカの人々が日常的に使用している現地語を完璧に理解できなくても、次々に友達をつくっていった。特に、子どもの面倒や家事一般をメイドに依頼し、彼自身が自分でなにかビジネスができないかと、平日の昼間も外に出るようになってからは、友達のできる範囲が広がった。いつの間にかあるコン

パウンド(低所得者居住地域)では、「バッドマン」というあだ名で知られるようになった。外国人である彼が、からかいややっかみをぶつけられたとき、臆することなく言い返していたとかで、「恐れ知らず」という意味でその名がついた、と夫は説明する。単に「怖いもの知らずの悪がき」って意味なんじゃないの、と思ってはみても、私自身のルサカにおける狭い交友範囲を考えると、彼のそのルサカでの溶け込みようは、うらやましくてたまらない。



写真①滞在する集合住宅の庭：ジャカラダの花盛りに子どもたちにチテンゲ（女性用の腰布）で仕立てたドレスを着せて（2017年9月撮影）

さて、私が不安に襲われるのは、夫が「I am coming」と言ったとき、連絡をよこさず帰宅しないときである。ほかのアフリカの国と同様、ルサカでも一般市民に普及している携帯電話を持ち歩いている彼には基本的に連絡がつく、はずである。私が仕事を終えて帰宅後、夫がいない場合は彼に電話する。そのとき彼は帰宅までの時間を「30分から1時間」など具体的に言うときもあるが、基本的には「I am coming」とだけ言う。アフリカでは時間がゆったり進む、もとい、アフリカ人は時間が守れないというのは、よく聞く話である。待ち合わせの時間が来ても現れない相手に電話してみると、「I am coming」とか「I am on my way」などと言われるが、実際にはその相手は自宅で靴紐を結んでいる最中だったり、外出する前に水浴びしようとしているところだったりするのだ。現地語に注目してみると、かれらは時間を先取りして話す感覚を持っているように思う。たとえば電話した相手から、「今（そちらに）行きます」を意図して、ルサカでよく話されているニャンジャ語で「Nabwera」（英語の直訳：I have come）という言葉が発せられる。また、ウガンダの首都カンパラでよく話されているガンダ語では、今いる場所から離れるとき、そこに残る相手に対して「もう行くね」という意味で、「Ngenze」（英語の直訳：I have gone）と言う。もう気持ち自体は、すでにそちらに行っている、すでにどこかに向かっている

という感覚。それでいえば、「I am coming」という現在進行形の英語は、かれらの感覚でいえばその前の状況、たとえ自宅でまだ出かける準備をしていたとしても充分成り立つ表現なのかもしれない。よって私も、夫から「あと 20 分」とか「1 時間くらい」という時間をあらわす言葉が出れば、その 2〜3 倍の時間を待つことを覚悟するし、「I am coming」という言葉も、日本語で解釈するならば「そっちに行く意志がある」程度にしかとらないようにしている。しかし、だ。「I am coming」と言ったきり、なかなか帰宅せず、電話しても相手が電話に出なかったり、「おかけになった電話番号は現在電源が入っておりません」という音声の繰り返しを聞くことになったりすると、アフリカ人の妻としての余裕は一気に消え去る。

遅れる理由

帰宅が遅れる理由はさまざま。たとえば急に友達にパーティに誘われたから行ってみたのだが、夜遅くになりタクシーがつかまらずすぐに帰宅できなかった、という場合。この「誘われる」というのが曲者である。実際に、「パーティがあるから来て」という招待も存在するが、ザンビアに限らず、ウガンダでも「〇〇に行くから、エスコートして」という依頼もよくある。その場合、本当にその場所まで行って、すぐに別れてもいいのだが、そこ

から離れるのに交通手段が必要になる場合やもしもその集まりに興味がある場合などは、そのままエスコートした相手が帰るまで待ち続けるということも多い。私が働くルサカの事務所でも、一度に複数の来客があった場合、それぞれの話を聞こうとすると「彼／彼女をエスコートしにきてだけです」と返答されることもある。

そんなわけで、遅くなった夫の帰宅時、私がおっとしながら扉を開けると、夫の横に夫にエスコートを依頼した男性が申し訳なさそうに立ちすくみ、「すぐに（帰宅のための）交通手段が手に入りませんでした。ごめんなさい」と謝ってきたこともある。この日、夫に「今もう（自宅近くの）〇〇通りを歩いているところ。すぐ帰るから」と言われた私は 30 分で戻るとふんだため、その後 4 時間ほど連絡が取れず悶々としていた。実際は、私との電話の直後に、夫は私たちと同じ集合住宅に住む友人に会い、親戚が集まるパーティがその友人の実家で開催されているからエスコートしてくれと、頼まれたとのこと。そしてそこへ向かったあと、夫の携帯電話のバッテリーがなくなってしまったとのこと。夫は「ほんと妻が心配するから早く帰ろうって言っていたんだけど」と言い放ち、その友人は縮こまる。とりあえずその友人を家に帰らせ、私は叫ぶ。連絡をよこせばそれで問題ないのだと。まず私の携帯の電話番号を覚えろ、そして友人の携帯電話を借りてかけろ！充電が早々

に切れるスマホなんて持つな！

急に知り合いが亡くなりザンビアの葬式がどういうものか気になって葬式に行ってみたところ、意外と場所が遠くてすぐに帰れなくなったということもあった。ウガンダの有名なコメディアンがザンビアに遠征公演に来ていたから、知り合いのウガンダ人に誘われてそれを見に行ってしまったこともあった。こうした急な予定変更の背景には、知人の多さがあるのだろう。私自身もカンバラで調査のために歩き回っているうち、たくさんの人に声をかけられるようになり、気づけば自分の目的地に到着するまでの間に、多くの人と挨拶をし、立ち話をし、写真を撮ったり、ちょっと飲んだり食べたりして、時間が簡単に過ぎ去っていく経験を何度もした。一度、時間がもったいないと感じて、立ち話がしまろうとするのを無理やり切り上げて自分の行き先に向かおうとしたときに、言い合いになってしまったこともある。知り合いの数の多さ、そしてその場で出会ってしまった人たちになにか声をかけられれば、その誘いを受け、共に過ごしていくという姿勢。この状況では目的地に時間通りに行くことがどんなに至難の業であるのか、想像がつく。

しかし再度言おう、私が不安に襲われるのは、彼が「I am coming」と言ったきり、連絡をよこさずにいるからである。帰宅する予定時刻が変わったならそれを連絡してほしいというただその願い

がなぜこんなに通じないのか。あるとき、連絡が途絶えたあと明け方近くに帰ってきた夫が、友人に誘われてクラブに行ったと報告するので、「クラブに行ってもいいからとにかく連絡してくれ」と懇願すると、「父親としてクラブに行くなんてそんなことをするのは馬鹿なことだから、それを連絡することはできない」と返された。それを聞いた私は、もう相手を阿呆としか思えず、ただただ呆然とするしかなかった。



写真②ザンビア大学を散歩中、自撮りに夢中になる夫と子ども（2017年4月撮影）

アフリカ版の金庫

ある晩、「ほら、金庫（safe box）を手に入れたんだ。ウガンダに戻るまでにできるだけ自分でお金貯めようと思って」と言って、夫は鉄板を溶接してつくられた箱を見せてくれた。前々から金庫

が必要だと言っていたので、自宅で働くメイドを警戒しているのか、などと考えていたのだが、簡単に持ち運べそうなその箱を見てわかった。彼は自分自身を警戒しているのだ。「これだとそう簡単に開けられないだろ」と彼は言った。私は笑った。

「おい、なんで笑うんだよ」と、言いながら彼も笑う。「な、わかる？これがアフリカ版の金庫なんだ。これを開けるためにはお金を払って開けてもらわなきゃいけないんだ。」そうか、彼は自分自身をコントロールできないことをわかっているのだ。彼が必要なのは、私が思う金庫とは異なるのだ。お金を使いたいときに、トンカチでえいっと割ることのできる貯金箱とも違う。他人の手を煩わせてお金を払わないと開けられない金庫。だからちょっとした出来心では開けられない。彼は知っている、自分の心が自分自身では止められないことを。



写真③こじ開けた後のアフリカ版の金庫とクワチャ（ザンビア通貨）の最高額紙幣（2018年9月撮影）

その時ふと、私はI am comingの謎も少しばかり解けた気がした。彼の帰宅途中になんらかの誘いが来たとき、彼は自分自身を止められないのだ。彼は、帰宅する気はある。ただ、友人たちから声がかかったときにそれを受ける身体は、彼が帰宅しようという意味とは別に走り出す。よって彼にとってこれは自分の予定を変更したから私に連絡する、という話ではない。彼にとっては帰ろうという気持ちはあり続けたままで、友人の誘いによってしまっているのである。よって私には「I am coming」以上の言葉を伝えられない。そして「I am coming」に付随する行動と、矛盾する行動をとっている自分の状況を、現在進行形で打ち明けることは、私が想像するよりもずっと心苦しいことになるのだろう。

はじめて、「I am coming」と連絡があったあとに、再度連絡を受けたのは、彼が親しくしていた友人がマラリアで亡くなったときだった。その友人とは、あるショッピングモールの駐車場で出会い、そのショッピングモールに行くたびに話し込み、時には自宅まで車で送ってもらうなどしていた仲だった。家にも訪ね家族にもよく会っていたとのことで、夫は友人宅へ赴き、そこから私に電話をしてきた。帰宅予定の時間は言及せず、「I am coming」ではなく「ごめん、ただ、今は、ここにいたい気分なんだ」と言った。その数日前にザンビア人の別の知人を交通事故で亡くしていた夫は、

続けざまのこの不幸に「I am coming」の意志がかき消されてしまうほどのショックがあったようだった。夫は、多くの人びとのかかわりあいの中で生かされている。もしかしたら、彼は阿呆ではないのかもしれない。もしかしたら、予定を、気持ちを、自分でコントロールできている私のほうがおかしいのかもしれない。異文化理解への道は、少しだけ痛みをともない、笑ったり泣いたりしどろもどろしながら続いていく。

「I am coming」

今日は帰り道にどんな出来事が夫に訪れ、その出来事に彼はどれくらい振り回されるのだろう。早く帰宅してねと思いつつ、この頃そんなふうに考えをめぐらせてみている。

大門碧（だいもんみどり）